

## René Vaillot: *Madame du Châtelet*

高橋安光

ヴォルテールの人間関係に興味をいだく者にとって彼の愛人シャトレ侯爵夫人(1706-1749)の生き方ほどやり切れないものはあるまい。彼女のあまりにも率直な生きざまはヴォルテールにとってのみならず現代のわれわれ男性にとっても抗いがたい魅力であり同時に耐えがたい苦痛でもあるからだ。

ライブニッツ、ニュートンの研究や紹介、マンデヴィル作『蜂の寓話』の翻訳、無神論的な『創世記の検討』や『幸福論』の著作など女学者としてのシャトレ夫人の業績についてはモーレル『ヴォルテールの友シャトレ侯爵夫人』(1930)とウェイド『ヴォルテールとシャトレ侯爵夫人』(1941)という二つの対照的な見方(一方は否定的、他方は肯定的)がすでに発表されてきたが、一個の女性としての生き方についてはペスターマン編『シャトレ侯爵夫人書簡集』(1958)同著『ヴォルテール』(1968)とモージ編『幸福論』(1961)に或る程度言及されているが、それらはヴォルテール伝説の良かれ悪しかれ最大の源泉であるデノワレステール『ヴォルテールと18世紀の社会』(1853)によって集成されたエピソードの断片的紹介にすぎなかったのだ。こうした現状ではルネ・ヴァイヨ氏の作品はもっともまとまったシャトレ夫人伝と言えるであろう。氏は序言の中でつぎのように述べている。「もしシャトレ夫人がたんなる女学者にすぎなかったならば、私はこの伝記を企てなかったであろう。彼女の学識が彼

女の時代及び女性としていかに驚歎すべきものであっても、それは当時の学問と相関的な価値しかもたないのだ。今日のわれわれにとって興味ぶかいのは女性として作家としての彼女の生き方である。」

シャトレ夫人の学問上の業績の評価については今は問わないとすれば、ヴァイヨ氏がシャトレ夫人を18世紀フランスの貴族社会を果敢に生きた現代的な女性として扱っているのは吾人の共感を呼ぶものである。そこには際立って新しい資料も独創的な解釈も見出されるわけではないが、従来の多くの資料を参照して公平な視点から判断し叙述しているのは充分な説得力をもつであろう。あえて「公平な視点」と言いそえたのは、シャトレ夫人なくしてはヴォルテールの思想的発展は有りえなかったとするウェイドの極端なフェミニズムや、シャトレ夫人がその子種を宿して出産のために死ぬこととなる最後の愛人セン・ランベールを間男呼ばわりするモーレルやペスターマンのごとき単細胞的な見方が目立ってきたからである。したがってヴァイヨ氏の作品は学術的な基盤に立った創作と言えよう。ヴォルテール研究の第一人者ルネ・ボモー教授が推薦文を寄せているのもそのためであろう。そのボモー氏の最後の言葉に注目してみよう。「情熱がシャトレ夫人を殺した、というヴァイヨ氏の結論は正当である。だがそれに付言しよう、彼女をその死後も生かしているのは彼女の理性である、と。」

やはり研究者ボモー氏は作家ヴァイヨ氏に充分満足できなかったようである。それは或る意味では当然のことであり、問題はボモー氏の言い方にあるのではなからうか。批判は相手の立場に立って相手の言葉を用いてこそ効果的であり、さもなければ無いものねだりか我田引水の誹りをまねがれないであろう。この両氏の結語にのみかぎって私見を述べさせていただくならば、こんな風にまとめてみ

たいのである。「彼女を殺し且つ生かしたのは情熱であり、彼女をその死後も生かしているのも彼女の情熱である。」しかしこれは私の総評ではなく、行きがかり上の表現にすぎない。そこで私は本書をよんで私なりにあらためて考えさせられた問題の中から二、三を抜き出して書評に代えたいのである。

第一はシャトレ夫人の性格の一端についてである。ヴォルテールの下僕ロンシャンの『覚書』からの引用であり、あまりにも有名なエピソードであるが、入浴中のシャトレ夫人がさらに熱湯をロンシャンに加えさせるために湯舟の中で両脚を開く場面についてヴァイヨ氏はこんな風に述べているのだ、「羞恥心の欠如であろうか、おそらくそうかも知れない、だが彼女にとって召使は男性ではないのだろうか。」この断定を避けたヴァイヨ氏の姿勢が私にはきわめて貴重に思えるのである。シャトレ夫人が羞恥心に欠けていたことは否定できまい、ロンシャンが虚偽を述べたのでなければ。実際、女性の羞恥心にはかなりの差があることを認めないわけにはいかないのだ。また召使にはセックスを感じないということも有りそうにないことではあるまいか。モンテスキュー『ペルシャ人の手紙』等にみられるハレムの女たちの黒人や奴隷や宦官すらにたいする情欲の燃え立ちを引き合いに出すことは行きすぎかも知れないが、大胆なシャトレ夫人の性感についてははっきり断定的なことも言えないのである。いずれにしてもシャトレ夫人を極度の異常性格者とみなしてきた従来の多くの夫人像にたいしてヴァイヨ氏が柔軟で謙虚なそれを対置したことは本書のメリットの一つと言わなければならない。

第二はシャトレ夫人の愛人となったセン・ランペールにたいする評価についてである。彼を思想史上からまともに取り上げたのはダミロン『セン・ランペール覚書』(1855)ぐらいであろう。一般的にはこのセン・ランペ

ールを二流の詩人以上に評価する批評家はなかったのである。たしかに彼の詩作『四季』は理屈ばくて、その手本となった英国のトムソンのそれには及びもつかないのだ。だがセン・ランペールが『百科全書』に寄稿した若干の論文はその良識ある審美眼から読みごたえがあるというのが私なりの評価である。つまり私がヴァイヨ氏に要求したいのはセン・ランペールの思想面をいま少しく掘り下げてほしかったということである。ところでポーランドの亡命国王スタニスラスの愛人ブフレール夫人、ルソーが恋い焦がれたウドト夫人、そしてシャトレ夫人と当代の名だたる貴婦人たちの御相手をつとめた男性セン・ランペールとはどんな容貌の持主であったのだろうか。その珍しい肖像画(『アルバム・ルソー』ガリマール、第100頁)で見るとおおよそのっぺらした美男子タイプであるが、その彼にシャトレ夫人が増髪用の油を贈っているという事実も見落とせないであろう。そこで私には一つの連想が生まれてくるのだ、それはルソーの妻テレーズと情を交わした英国の作家ボズウェルと同様に交際した相手の光によって歴史上に浮かび上がってきた人物ということである。歴史上の人物とは多かれ少なかれそうしたものかも知れないのだが。

第三は本書と直接係わりをもちえないかも知れないが、少なくとも私個人にとっては重大な関心事なのである。ヴォルテールが愛人シャトレ夫人をセン・ランペールに奪われた(こんな言い方は適切ではないが)のは今の私と同じ年頃の54歳の時である。私は30年前にこのエピソードをはじめて知った時と現在とは印象や考えがかなり違うのである。奪うことは楽しみであり、奪われることは死の苦しみであることを私の年齢になっても知らない者はまれであろう。したがってこうした苦悩を他人事として淡々と叙述しうるのは若すぎるか無神経な人間だけではあるまいか。

まったく新しい資料を発見したのならばいざ知らず、古びたエピソードにもとづいて論述をつづけることは、これ以上やめてもらいたいものである。その意味では本書の著者もいささか責められて然るべきであろう。

René Vaillot; *Madame du Châtelet*, éd.  
Albin Michel, 1978, 350 p.